

インダス川上流の古代巡礼路沿いにのこされた岩画と信仰の図像 ―パキスタン・カイバルパクトゥン州のギルギット、バルチスタン仏教美術調査ノート (註1) ―

報告：服部等作

1. はじめに

ヒマラヤ山脈とその支脈のカラコルムやヒンズークシ山脈が交叉し、それらの渓谷沿いを流れるインダス河上流地帯は、今日にいたるまで人の出入りが困難な地帯として知られる。一方で、この地域は、南方のインドと北方の中国西域―中央・西アジアに通じる回廊部となり民族、文化、信仰、物資の交易と巡礼の古道が形成されてきた。古道をめぐる流入した人達は、旅の安全祈願や成就の感謝を崖や岩に人物、仏像、仏塔、碑文、図記号を総称し岩画 (Rockcaving, Petroglyph, 岩石彫刻の呼称がある)、磨崖彫刻、ならびに彩色岩壁画を含め長期にわたる膨大な製作活動になっている。

本稿は、インダス川の古道沿いの岩画について科学研究費による調査(註1)をすすめ、2017年度の پاکستان側インダス川上流沿いカイバルパクトゥン州ギルギットの古代シルクロードから現在に至る古道沿いの現地調査ノートの一部を紹介する。

2. 調査地の概要

ヒマラヤ山脈の西南麓沿いを流れるインダス川とカラコルム、ヒンズークシ山脈と渓谷から流入するギルギット川、フンザ川の合流地帯は、インド洋、アラビア海からの高温多湿な空気が高い山脈に遮られ多量の降雨がインダス川の源流になり回廊部を形成し、南方のインドと北方の中国西域―中央・西アジアの乾燥地帯に通じた。このためインダス川の回廊部一帯の交流は、王権の進出に加えて交易商人やインドに三宝(仏・法・僧)を学ぶ求法僧達が文化、信仰、物資がヒマラヤ山脈北側の西域南道、天山南路/北路を結び、あるいは葱嶺山脈を越え中央アジアのソグディアナへ通じた。今日では古道沿いのルートの多くが土砂や激流にのみ込まれているが、現在この回廊部一帯は、山岳道路が北西インド・ギルギットからカラコルム、西ヒマラヤ山脈の高山峠経路で中国西域、中央アジアを結ぶ。一方で英国から独立後にインドのヒンズー教徒側のジャムカシミール州とパキスタンのイスラム教徒側のアサドカシミール県が複雑で曖昧な国境の実効支配権を巡り係争が長期間つづいている。ここで当地の経済、文化のなかで消滅しつつ文

化遺産についてインダス川上流にあるインドジャムカシミール州側のチャナブ、ジェラム両川沿い及びパキスタン側のインダス川上流沿いの仏教美術を調査した(註2)。本稿は、2017年度の پاکستانでの岩画調査から記録ノートの一部を示す。

2.1 回廊部の調査の歴史

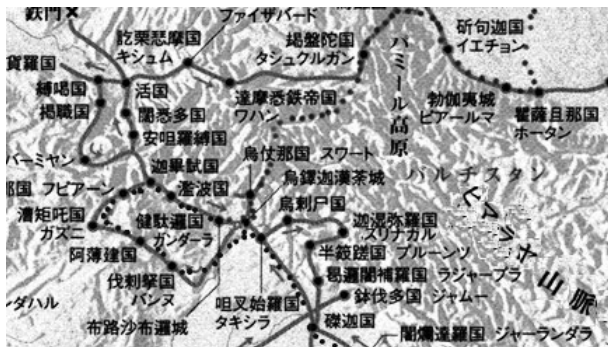
かつて中国からインドへ求法の旅をした多くの僧達は、代表的な法顕(337―422年)の「仏国記」(註3)、玄奘(602―664年)の「大唐西域記」(註4)、慧超『往五天竺行記』(註5)が当時の貴重な情報を紀行記録にのこした。[地図1]

五世紀の法顕の紀行文(註3a)は、「葱嶺・陀歴国」を次のように述べている。

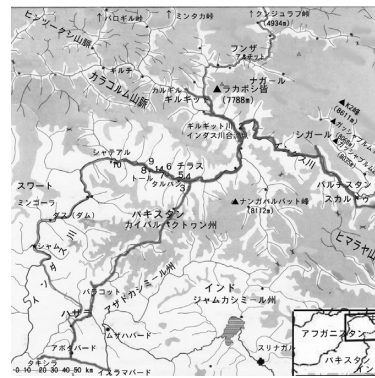
「葱嶺を渡り終われば、そこは北インドの高所(峠)越えしインダス川の一支流フンザ川の上源に着く。ここから健駄邏国までを北天竺である。その境に入ると一小国があり、陁歴という(註3b)」、法顕はヒマラヤ西部の峠を越えて北西インドの陀歴国(ギルギット)に入り、身毒川沿いに宿响多国、烏仗那国へと峠をぬけ健駄邏国(ブルチスタン)の布路沙布羅を通過した。この先はオヒンドーすなわちアレクサンドロス大王が渡河したインダスとスワート川の合流点からインドに通じた。

七世紀の玄奘(三蔵法師)の「大唐西域記―葱嶺・陀歴国」の紀行文は、「鉢露羅国(註4a)は周囲四千余里ある。大雪山の間において東西は長く南北は狭い。麥・豆が多く金銀(註4b)を産出する。金を利用するお蔭で国家の財政は豊かである。気候は唯寒さ烈しく人の性質は粗暴である。仁義に薄く礼節については耳にしたこともない。容貌は醜く毛皮・毛織物を着ている。文字はおおむね印度と同じであるが、言語は、諸国と異なっている(註4c)。伽藍は、数百カ所、僧徒は数千人いる。学ぶところは、専ら何(派ということもなく)、戒行は、多くみだれている」

玄奘は、葱嶺から中央アジア入りしバーミヤンの大仏で知られるバスマンカビシ、タクシヤン、迦畢試国を経由し呬叉始羅国の北西インドからインドをめざした。玄奘の紀行記録は、ギルギット川からインダス川の合流点にむかう鉢露羅国通過の困難さを(法顕と同じく)あげ迂



地図1 インドへの巡礼路(法顕……玄奘→で示す)



地図2
インダス川沿いギルギット―チラスの調査地

- 1. フンザ―ハルディキシュ,
- 2. アラム橋, 3. チラス付近,
- 4. タルバン付近, 5. ホダール,
- 7. オシバット, 8. トール, ミ
- ナル―ガハ, 9. 北トール
- 10. シャティアル, 11. シガル

調査は、赤太線に示した

回している。法頭、玄奘の紀行記録は、南のインドと北の中国西域の途上で行く手を拒むインダス川沿いの難路をたどる旅の様々な情報を記しているが、おびただしい当地の岩画や碑文の記述がなく、後のスワートやインドへの紀行の間の伽藍一寺院、仏塔、信仰と僧侶数、仏陀釈尊の伝記である仏伝図、同じく釈尊の前生における様々な修行を物語る本生図など信仰、伝承をふくめた確かな地勢、慣習の様々な情報を記述した内容と大きな差がある。

以上の20世紀初頭まで地図上の空白であった内陸アジアに求法僧達の紀行は、貴重な情報源として普遍的内容がある。

20世紀ではハンガリー人で英国籍の考古学者スタイン^(註6)は、カシミール・スリナガルを出発後ダレルの方向に流れるインダス川沿いに遡上し、フンザ川合流点上流のフンザ高原と氷河地帯の高山峠(ミンタカ峠)越えの後にヤルカンドを経てホータンの調査に向かった^(註6a,b)。その間スタインは、ギルギット川、フンザ川やインダス川沿いに北方に通じアボダバードの仏塔やギルギット渓谷の磨崖像(現在不明)を記録するがギルギット川とギルギット橋、下流の合流点付近の無数にある岩画を求法僧と同様に記録せず、当時から岩画があった古道を通らなかった可能性がある。後のイタリアの調査^(註7)は、露出した石像を記録するにもかかわらずである。近年インダス川沿いの古道沿いに残されていた岩画がドイツ・パキスタンの共同調査でその存在が明らかとなり成果の一部が公表されつつある^(註8, 9, 10)。

2.1. ギルギットの地勢と岩画について

インダス川沿いの岩画や碑文の岩画は、ヒマラヤ造山活動で強固に形成された花崗岩表面を岩石、金属製工具を用い深さ数ミリ程で線状にペッキングとよぶ方法で浅く図像を打刻する。岩画の表面に最少限の労力で効率的に差異が生じ遠くから反射を視認でき、耐用年数が得られる技術である。とりあげた岩画の図とGPS測量点を表1に示した[図2.1、図2.2、表1]

一方この地の環境に起因する岩画への悪影響は、年間を通し雨期一乾期一豪雪、昼一夜の寒暖差、大量の雨量、夏の異常高温と乾燥、冬の積雪と凍結などの過酷な自然環境が長期にわたることから、岩の表面を黒く光る古艶のパatina (patina) と光沢 (desert varnish) で覆われ風化と剥落が進んでいる。加えて1985年カラコルム山岳道路の開通、今世紀の初頭のダム建設計画による車輦と人が増加、路肩の岩の除去、岩への落書き、盗掘が横行している。加えて断続的に発生する山塊・土砂崩れ、洪水による岩の割れや転倒にともない、古道の崩壊がすすむと同時に古道沿いの仏教時代の遺物、伝統的民家、宗教的な建造物にも影響が及び現状維持が困難となっている。このため岩画の記録は、岩画の地点をGPS、採寸困難な岩場をレーザで精密計測した。また岩画の図像は、スケッチ、写真撮影、ならびに拓本を採取しすすめた。湿式による拓本が困難なため、比較的表面が荒れていずに、安全で安定した岩画を対象として乾式で採取した。[図2.3]



図 2.1 ペッキングの岩画と現代の落書き (撮影 2017-09-20 Shigar 村)



図 2.3 岩画採取の状況 (Skardu-Shigar, Gazupha 地区)



図 2.2 土砂崩れによる岩画の転倒と古道の崩壊状況



図 3.1 仏座像 (タルパン橋左岸にて)



図 3-2 仏座像 (シンナラ村付近)

3. 岩画と磨崖の事例

岩画は、スカルドウ、バルチスタン、ギルギット（チラス、タルファン地区）で調査し以下の三群が特徴をもつ^(註8)。

I群：仏像表現の岩画は、a) 仏陀の象徴的表現（仏陀（釈迦牟尼仏陀（釈尊））をする仏塔、卍、法輪、光輪、仏足石、手形、衣、ならびに蓮華、開花する花で仏を荘厳する象徴物が加わり、仏像が登場しない紀元1世紀以前の表現である。つぎに b) 仏像を表現する2世紀以降の1) 単独像（仏陀、弥勒、観音、勢至菩薩像、宝冠仏、弥勒仏陀像の座像と立像、及び2) 群像に仏陀と三尊形式の表現 [図3.1]、釈尊 [図3.2] の伝記である仏伝図、釈尊の前生の様々な修行を示す本生図が多く、眷属、執金剛神、仏弟子、供養者像が加わる。このほかに3) 不明確な像があり、もともと岩画が現地制作されたことは間違いないが、制作者が元々の岩画を未完成な上に後世の追加もある。その表現は、騎馬民族風、中央アジア・イラン風、インド風、山岳地方風の表現もあり各地からの人々が制作したとする推定も可能である。

II群：ギルギットーチラス間の古道沿いにのこる碑文（graffiti、複数 graffiti）の文字は、インド系（サンスクリット、カロシテー、ブラフミー、グプタ）、チベット（古一近世）、イラン系ゾグド語、漢文があり、その表記内容から単独の制作が多い。また岩画に付随する碑文から^(註11) 職業身分、人種、宗教上の巡礼僧、行者、商人と幅広く、紀元前後から仏教の盛期8世紀にいたる内容と指摘がある^(註9)。

III群：仏教的主題や碑文以外の表現：人物（戦士、牧人の単独ないし複数人物像、騎馬人物、狩猟場面）、人物と動物（山羊、狼、馬、鳥）と道具（斧、投石具など）、記号（太陽、円文）を合わせた表現がある。

以上に分類した岩画の内容を表1に示す。磨崖彫刻像と岩壁の彩色画は、紙数の関係から次稿に譲りたい。[表1]

3.1.1. 仏像の岩画画像

まず仏像の岩画の代表例を [表1] にあげた。[表1]

単独の仏像の岩画が多く一般的に方形の基壇上の仏陀座像で定印を結び、膝を強くはり出す結跏趺座像で頭光背をもつ像が多く、多分にガンダーラの仏教美術の無仏像表現の時代（前1世紀）から仏像を表現するガンダーラ、グプター後期グプタ、密教、ならびに地方的造形 [図3.3] まで長期に及ぶ表現がある。[図3.1] そのなかで瓔珞、腕輪で身荘厳する岩画の仏像は、頭光背、定印、結跏趺座像、基壇が岩の埋没や表面の風化で確認上に難があるが、クシャン朝カニシカ王の時代2世紀半頃の弥勒仏陀銅貨と同じ弥勒仏表現とみなせ、近接するスワートやカシミールの特徴的な密教仏にも共通性がある^(註10)。[図3.2] 岩画の仏像には、山形の宝（王）冠をかぶる菩薩座像があり左手に牽索、右手に触地印を結び二重連弁に座す像がある。この座像と類似する青銅一

鑄製の宝冠菩薩座像は、山形の宝冠と円文の頭光背が北西インドの密教的な特徴をもち、右手を与願印、左手を差し出して掌を握り、大仏座（仰蓮と反花二段と框座）を中央で締め結跏趺座する。この青銅像と岩画像が共通し、特に小さな瞳の表現が青銅像の銀象嵌の眼目を転写したかのように写る。また青銅像の肩から腹部に達する▽形の飾りは、パーミヤン石窟の“飾られた仏陀像”と通じる表現を思わせるが、岩画像の浅い彫りにはその表現がない。

図表	呼称	地区名	GPS 測量値 (標高 m)
図 2.1	岩画の画像落書	Gazupha, Shigar, Skaidu	北緯 35°24' 50.79" , 東経 75°44' 37.75" (2500m)
図 2.2	埋没岩石	Gazupha, Shigar, Skaidu	北緯 35°24' 59.24" , 東経 75°44' 46.08" (2438m)
図 2.3	拓本採取の状況	Near Talpan Bridge, Gilgit	北緯 35°24' 55.60" , 東経 74°07' 54.55" (1042m)
図 3.1.	仏座像	Gazupha, Shigar, Skaidu	北緯 35°24' 55.60" , 東経 75°44' 43.16" (2438m)
図 3.2	菩薩座像	Near Talpan Bridge, Gilgit	北緯 35°26' 04.91" , 東経 74°26' 21.92" (1172m)
図 3.3	宝冠菩薩座像	Gor, Gilgit	不明
図 3.5.	初転法輪説法図	Talpan Bridge, Gilgit	北緯 35°25' 03.72" , 東経 74°07' 54.52" (1042m)
図 3.6.	仏陀と執金剛神	Talpan Bridge, Gilgit	北緯 35°25' 03.73" , 東経 74°07' 54.72" (1053m)
図 3.7	損傷状態の岩画	Talpan Bridge, Gilgit	北緯 35°25' 05.72" , 東経 74°07' 31.40" (1043m)
図 3.8	同上・仏像と仏塔	同上	同上
図 3.9	仏像と仏塔	同上	北緯 35°25' 05.43" , 東経 74°07' 31.69" (1051m)

表1 仏像を線刻した本報にあげた岩画 (スカルドウ、バルチスタン、ギルギット) 註2



図 3.3 宝冠菩薩座像



図 3.4 宝冠弥勒仏座像

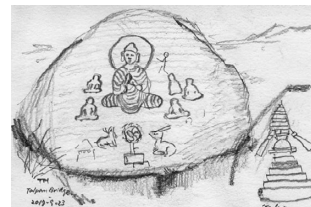


図 3.5 初転法輪説法仏伝図 - 仏陀と五大弟子 (筆者作画) (チラス・タルパン橋左岸)



図 3.6 仏陀座像と執金剛神 (筆者作画) (ジャヤチャンドータルパン橋左岸)

宝冠を被る姿は、宗教的・王権的であれ一定の権力を示すもので、仏教で「スッタ・ニパータ」や「ミリンダ王問経」が示す仏陀の普遍的な考えを底流にして後のササン朝、パーラ朝の王冠を被る像に影響した。この青銅像の出土地と伝わるスワートのウディグラムは、カシミールやインダス川の回廊部を経由し中央アジアに通じるためマケドニア軍のインド侵攻に頑強に抵抗した王城、法顕や玄奘が巡礼した仏教と密教の聖地の遺跡、磨崖仏の遺構が多い。[図 3.1、図 3.2]

チラス一帯の岩画の図像の特徴は、文様、狩猟図、仏塔、ならびに仏伝図や本上図の表現が多い。仏陀最初の説法場面となる初転法輪をむすぶ仏陀を五大弟子と鹿が囲む鹿野苑^{サルナート}の場面（タルパン橋右岸）の岩画は、通肩で説法印を結び、膝を強くはり出し仏陀の結跏趺坐と組合せた表現で、素文の頭光背は古様で銘文はなく、無仏像のインド・サンチー第一仏塔、アマラバティ大塔の仏教美術に溯る。[図 3.5]

仏陀と執金剛神の岩画は、通肩で施無畏と与願印で二重の頭光背で結跏趺座し、密教期の特徴的表現をとる。[図 3.6]

本生図の「捨身飼虎図」は、奈良県の法隆寺にある玉虫厨子の原形にあたるガンダーラ特有の自己犠牲を強調する場面である^(註12)。この主題が中央アジアのキジルや敦煌石窟壁画に伝播し、日本にわたった。自己犠牲を表現する同様の像は、バルフト仏塔にたどれる「鴿本生図」、バルフト、サンチー仏塔にたどれる「降魔成道図」があり、仏像の登場に伴ってマツウーラやガンダーラの仏伝彫刻に引き継がれる。チラスの岩画で未確認となった岩画は、本生図に戸毘王、摩訶薩埵本生図^(註13)がある他に、仏像の最初期の表現としてダールの指摘がある仏像と仏塔の合成像^(註14)。こうした岩画は、岩の様子から崩落か盗掘されたか不明で現地を確認できなかった。

ペンキでひどく落書きされた岩画の仏陀像（タルパン橋左岸ージャヤチャンド）は、四体の仏と供養者、および仏塔を描いているが下の図像を書きおこした。[図 3.7] 右から水瓶をもつ宝冠弥勒菩薩立像は、香炉をもち左の飾られた仏陀座像に跪坐で拝礼するシンハラ人信徒、禪定印の飾られた宝冠仏座像、仏塔、禪定印の仏座像、施無畏印の宝冠菩薩を刻んでいる。仏陀と仏塔両脇の

二仏陀像は、挙身光背の間から植物の蔦が伸び、仏陀と仏塔への篤い信仰をつたえる[図 3.9]。縦状のこまかな衣文について、右から二番目の仏陀座像は、特異な▽状のケープを肩にかける特徴的な像で、同様の像がアフガニスタンのバーミヤン石窟の五三〇窟壁画^(註15)、ギルギット、スワート、ならびにカシミール^(註16)に▽状ケープケープをまとい宝飾品飾りをつけた「飾られた仏陀」と呼ばれる仏像と同じである。その由来は、バーミヤン石窟を調査したアッカが▽状ケープをもつ像を「Le Bouddhiques paré」と称した始まりにある。もともと「飾られた仏陀」像は、中央アジアから7世紀頃エフタル族が北西インドへ進出したエフタル族の王や支配者の像を輸入したとされる^(註13)。像は、右方向に向いた菩薩像が道路側に穿たれてあり、次いで菩薩、仏塔の前に頭光背と身光背が二重でとりまく。左端の仏立像がある。いずれもカシミールの密教像の特徴的な二重の衣文を表現する^(註16)などスワートとカシミールの青銅仏の独特の装束は、チラスの岩画[図 3.4]と共通する象牙、木製のカシミール製の二筋状に衣文表現の仏像があり7から9世紀頃におよぶ作風をつたえるのみならずインダス川沿いの岩画像と共通しカラコルムーヒンズークシヒマラヤ山脈の広域にわたる美術表現となっている。

当時ひろく信仰を集めた三尊像、仏伝図や本上図は、タルパン橋を中心にしたインダス川沿いの大きな岩に磨崖した岩画に残る^(註10)。一方でインダス側とギルギット川の合流点付近は、狩猟風景、仏塔が多く、仏伝図や本上図がない。インダス川沿い一寒村に崖に仏伝図や本上図の一部がのこるが、長く風雨に曝露されてきたため図像の確認が困難となつてのこされている。またスカルドウからバルチスタンのマンタールにかけてはチベット文字とともに曼荼羅形式の磨崖仏が残されている。玄奘が紀行で記した大菩薩像は、この地域で未確認となっているが、相応する磨崖の仏立像が確認できた。像高 2.5メートルの大きな弥勒菩薩立像の磨崖仏は、(ギルギット市近郊カルギル)、アフガニスタンから北西インドに多い土着的な作風をを物語る。またパコール村の蓮華持菩薩立像(蓮華座、頭光背除く像高 3.8メートル)の磨崖像がある。この地に通じた巡礼路となるスワートにはダルゲイ、シルコートなど多数の磨崖像がある。



図 3.7. 損傷状態の岩画ー (図 3.8 参照)

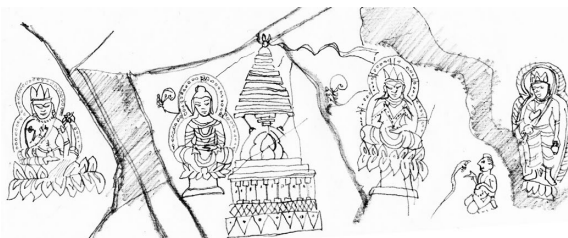


図 3.8 仏一菩薩座像、飾られた仏陀像、仏塔 (筆者作画)



図 3.9 仏陀立像と観音・弥勒菩薩, (Chilas I Talpan 橋右岸上部)

4. まとめ

本稿でパキスタン・カイバルパクトウン州の主にギルギット県のインダス川沿いに残る線状に打刻した岩画を概説した。前年に調査したインド・ジャムカシミール州のインダス川下流のパキスタン側調査地である。岩画の主題とする図像は、騎馬民族から仏教徒、交易商人が制作したとおわれ I から III 群に大別した。いずれも線を打刻する手法で、岩画の特徴的表現となっている。

この地域一帯は、南のインドと北の中央アジアの回廊部を形成しているため、古くはアレクサンドロス大王の軍隊がインド侵攻ルート、後のインドの仏教が国際化する経由地である。北西インドでインダス川の本流と合流するスワート川の仏教美術および隣接するアフガニスタンのワハン渓谷、パキスタンのスワート川沿いからインダス川に合流し下流のシンド地方にまで岩画の文化が見出せる^(註18)。さらにヒマラヤ山脈の周縁に岩画や摩崖像も残っている。カシミールからラダックに通じるムルベックに一面四臂弥勒菩薩、ラサから吐蕃古道の青海省玉樹州の勒巴溝口の線描岩画(貴人礼仏、説法図)とその北東にある貝溝、ビドの文成公主廟で磨崖仏の胎蔵大日如来と八大菩薩が残る。インドと中国西域の新疆、西藏自治区、青海、雲南が交易や巡礼路として線的に結ばれ、面的にも仏教徒による図像、騎馬民族や交易商人により遺された岩画の文化を形成していた。一方で、今回の調査地ギルギットのインダス川沿いに限定しただけでも道路網の整備やダム建設と山岳の地崩れなどから消滅がすすんでいる。こうした現状から岩画や磨崖像のさらなる調査が必要である。

5. 謝辞

今回の調査は、現地の文化財調査で菅澤茂氏、M.Usman Mardanvi 氏、Dr.Ashraf Khan-Quaid-i-Azam Univ., Dr.Nadaullah Sehrai-Pesawar Univ.Museum, ならびに管理関係者により各種のご協力いただきました。本稿を借り感謝を申しあげたい。

6. 註と参考文献

註1. 本研究は、科学研究費補助金「ヒマラヤをめぐる展開された密教工芸の造形と表現の研究」基盤(B) 課題番号 26300017、研究代表・服部等作、研究分担者4名による。調査は、2015-2016年がインド側ジャムカシミール州の調査(2015年金沢大学・森雅秀教授、2016年:成城大学・中野照男教授参加)、2017年がパキスタン側カイバルパクトウン州のインダス川、ギルギット河沿いの岩画調査を京都府文化財保護課・菅澤茂専門官と共にを行った。

註2. 表1に2017年に調査した岩画像の一部を示す。調査の行程は、地図に示すイスラマバードスカルドウへ(空路)、以後は陸路で太い赤線で示したスカルドウ-チラス、バルチス

タン、ギルギット(地図2の2.アラム橋,チラス,タルファン付近,ホダール,オシバット,カルギル磨崖)である。シャティアルからスワートに入国制限がありチラスに戻り、峠を經由しバーラマI遺跡、タキシラ、ペシャワール、イスラマバードの博物館、大学研究者と研究交流を実施した。スワートの磨崖仏調査は、期間中の外国人入国制限を受け中止した。

註3. 法顕,楊銜之(著),長沢和俊(訳)-1971:『法顕傳・宋雲行紀』,東洋文庫,194,平凡社

a) 鉢露羅と同系の語は『宋雲行紀』・『魏書』西域伝の鉢盧勒、波路、『唐書』西域伝の鉢露、布露・勃律は Bru-ša の蜜に Bru に相当する。チベット文書には Sbal-ti (ti が地方の意の接尾辞、パルティ族の住む地方の意)

b) 陀歴(陀歴と同じ、陀が陀の俗字) インダス川上流チラス Chilas ~コットウガラ Kotgala Gaiah 間の右岸、特にガイア Gaiah 付近をダレル Darel 地方)。ここの多くの僧がおり、みな小乗学である。この国の昔、羅漢^(註3b)がいた。〔彼は〕神足力をもって一人の巧匠をつれ、兜術天^(註3c)に上って弥勒菩薩の身の丈や色貌を見せて還り下り、木を刻んでその像を作らせた。〔そのために〕前後三回(兜術天に)上って観させ、このようにして後、ようやく像が出来上がった。〔その像は〕長さ八丈、跏趺の足の長さ八尺あり、斎日^(註3d)には常に光明がある。諸国の王はきそって供養を盛んにした。〔この像は〕いまなおここに現存している(註3d:磨崖像は、ギルギット市の南10kmほど川の支流のカルガ弥勒磨崖立像、インダス川沿いのブネール、スリナガルからラダック路間にムルベック弥勒磨崖立像、またスワート川のガルゲイ、シャコーライをはじめ、この地が磨崖や木彫大仏が多数あり、現在もその一部が点在している。

c) 土谷通子-2010:『法顕傳に見える陀歴仏教寺院』、オリエント53-1, pp. 120-143、オリエント学会、ダレル渓谷のブフッチ村古老から検証の聞き取り記録である。

註4. 玄奘,水谷真成(訳)-昭45:『大唐西域記』中国古典文学体系22、平凡社、a) 法顕伝のスワタ・宿啊多国である。卷三・一、b) 当地の砂金は、ギリシア史書『ヘロドトス』松平千秋訳三.102(p.159)にも、当地の産金は古くから知れ、…(中略)…蟻の掘り上げた砂が金を含んでいるのである。インド人はこの砂を目当てに無人地帯にでかける」、当地の言語は古いチベット語と言われている。

註5. 前掲註3、pp.161-216、『宋雲行紀』に唯一のエフタルの遊牧国家習俗、回廊部の内容を記述がある。

註6. Stein.M.A (1903):Sand-Buried Ruins of Khotan は、中国領トルキスタンにおける考古学的・地理学的探険に関する個人的報告、現在インド・ジャムカシミール州とパキスタ

ン・カイバルパクトウン州は、当時アングロ・インディアンフロンティア（北西インド、北西辺境州）とよばれ、内陸アジアの地図空白地帯をめざし英国、露、独、仏、伊、スエーデンが加わり、グレートゲームとよばれた。列強諸国の競争は、国家的な事業で唯一個人的に組織した日本の西本願寺による大谷探検隊が三次に及んだ派遣事業をすすめた。英国はインドの辺境の政府支所・軍駐留地をおいたスリナガルを起点に（5/31、1900年）して、途上のインダス川がチラスやダレルの方向に流れるインダス川沿いに遡上し、ギルギット川、フンザ川沿いの行程とアボダバードの仏塔遺跡を記録するがギルギット川合流点を經由する川沿いの岩画や磨崖仏の記録がない（1900年、6/15）。ギルギットの溪谷にある磨崖像（kargah）を經由しミンタカ峠を越えホータンに向かう。b）Stein.M.A（1907）:Ancient Khotan Vol. 1 – detailed report of archaeological explorations in Chinese Turkestan, vol. I. Text、前掲註6aの考古学的探検の詳細報告にスリナガル經由フンザ川への行程、遺跡をあげる。他に旧北西辺境州（現カイバルパクトウン州）ペシャワールスワート經由でギルギットに至る古道をも利用している。

註7. Phillip de Phillipi（1913-1914）:Storia della Spedizione Scientifica Italiana nel Himàlaia, Caracorum e Turchestàn Cinese: vol.1、ヒマラヤ、カラコルム、中国西域への科学派遣団である。他に Ciotto Dainelli や A. Spranger の旅行は、ラダックからカラコルムを越えカシュガルへのエッセを含む内容である。

フランスのペリオ、ドイツのルコック、スエーデンのヘディンらは、中国西域のタリム盆地一帯の仏教の石窟寺院、遺跡ならびに地勢調査をすすめた。1985年に中国のカシュガルをむすぶ山岳道路が開通しドイツがパキスタンと共同調査がすすみ当地も次第に踏査が可能となった。

註8. Jettmar, Karl-2002:Beyond the Gorges of the Indus: Archaeology before Excavations, Oxford University Press, USA, a) fig.4, b) fig.24

註9. Jettmar, Karl-2002:Between Gandhara and The Silk Roads, Philipp von Zabern, Pl.20

註10. Cribb J., & Errington, E., -1995:「THE CROSSROADS OF ASIA, Transformation in Image and Symbol in the Art of Ancient Afganistan and Pakistan」, Intn. Conference. 1992, AII Trust, Cambridge, U.K, a) Pl.193, pp.193-197,

註11. Bianca Stefano-2005:Karakoram. Hidden treasures in the Northern Areas of Pakistan. Umberto Allemandi, a) Fig.23.

註12. 塚本啓祥 -2001:『インダス上流の刻画・刻文の特色とその

歴史的意義』、印度學佛教學研究、第50巻、第1号、平成13年12月、碑文は、大乘經典の華嚴經、法華經、無量壽經、金光明經等の仏・菩薩に対する称名の功德を説く、三世十方の諸仏思想の展開に関連し多くの仏名による呪文的效果の要求が背景にある。

註13. 高田修一 2004、『仏教の説話と美術』講談社、pp. 216-268、薩埵本生図は、法隆寺・玉虫厨子の薩埵王子の捨身飼虎図で知られ釈迦の前世である王子は、飢えた虎とその7匹の子のため自身を投げて虎の命を救った説話で『金光明經』が説く。他に施身聞偈は、釈迦の前世の雪山童子が無仏の世にヒマラヤで菩薩修行の時、羅刹が諸行無常・是生滅法と述べ、残りの半句を聞くため生滅滅已・寂滅為楽の半句を聞き、木、石に書き残した後に空腹の羅刹のために刹那が投身した。羅刹は帝釈天に姿を戻し、童子の身を受け止め未来に我らを救い給えといった。釈迦の前世である慈悲深い尸毘王本生図は、北伝説話では、鷹に追われた鳩（毘首羯磨天）を救うために、王が鳩と同じ分量の自分の肉を切り取って鷹（帝釈天）に与え王の慈悲心を量った。南伝の説話ではバラモン僧に両眼を布施している。自己犠牲の説話が北西インドで多い。

註14. 前掲、註8

註15. J.Hackin et J.Carl,-1933: Nouvelles Recherches Archeologiques a Bemiayan 1930, (MIMI, A tome III) , Paris,.

註16. P.Pal-1975:Bronzes of Kashmir, Akademische, Druck-u.Verlagsanstalt, Graz, Austria, a) pl.72, Fig.81, スワートの請来とされる

註17. 服部等作 -2018 :『北西インドからヒマラヤを越えて伝わった青銅仏』, pp.167-200、中央公論美術出版社、

註18. Zulfiqar Ali Kalhor-2013 : Buddhist Traditions in the Rock Art of Sindh, Pakistan, Journal of Asian Civilizations, pp. 115 -146, Vol. 36, No. 1, July,